

伊藤左千夫

野菊の墓



野菊の墓

後の月のちという時分が来ると、どうも思わずには居られない。幼ない訳とは思うが何分にも忘れることが出来ない。もう十年余も過去った昔のことであるから、細かい事實は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今猶なお昨日の如く、其時そのときの事を考えてると、全く当時の心持に立ち返って、涙が留めどなく湧わくのである。悲しくもあり楽しくもありというような状態ありさまで、忘れようと思う事もないではないが、寧むしろ繰返し繰返し、考えては、夢幻的の

興味を貪むさぼつて居る事が多い。そんな訳から一寸物ちよつとに書いて置こうかという気になったのである。

僕の家というは、松戸から二里許ばかり下つて、矢切やぎりの渡わたしを東へ渡り、小高い岡の上でやはり矢切村と云つてる所。矢切の斎藤と云えば、此界限このかいわいでの旧家で、里見の崩れが二三人ここへ落ちて百姓になつた内の一人が斎藤と云つたのだと祖父じじいから聞いて居る。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るような椎しいの樹が四五本重なり合つて立って居る。昔村一番の忌森いもりで村じゆうから羨うらやましがられて居る。昔から何程暴風あらしが吹いても、此椎森のために、僕の家許り

は屋根を剥はがれた事は只の一度もないとの話だ。家なども随分と古い、柱が残らず椎の木だ。それが又煤すすやら垢あかやらで何の木か見別みわけがつかぬ位、奥の間の最も煙けぶりに遠いところでも、天井板がまるで油炭で塗った様に、板の木目も判らぬ程黒い。それでも建ちは割合に高くて、簡単な欄間もあり銅の釘隠くぎかくしなども打つてある。其釘隠が馬鹿に大きい雁がんであつた。勿論もちろん一寸見たのでは木か金かも知れないほど古びている。

僕の母なども先祖の言い伝えだからと行って、此戦国時代の遺物的古家ふるいえを、大へんに自慢されていた。其頃母

は血の道で久しく煩わづらつて居られ、黒塗くろぬり的な奥の一間が
 いつも母の病びょうじ褥よくとなつて居た。其次の十畳の間の南隅みなみすみ
 に、二畳の小座敷がある。僕が居ない時は機織はたおり場で、僕
 が居る内は僕の読書室にしていた。手摺窓てすりまどの障子を明け
 て頭を出すと、椎の枝が青空を遮つて北を掩おおうている。
 母が永らくぶらぶらして居たから、市川の親類で僕に
 は縁いとこの従妹いとこになつて居る、民子という女の兎が仕事の手
 伝やら母の看護やらに来て居った。僕が今忘れることが
 出来ないというのは、其民子と僕との関係である。其関
 係と云つても、僕は民子と下劣な関係をしたのではない。

僕は小学校を卒業した許りで十五歳、月を数えると十三歳何カ月という頃、民子は十七だけれどそれも生れがおそ晩いから、十五と少しにしかならない。瘦やせぎすであつたけれども顔は丸い方で、透とおき徹るほど白い皮膚に紅味あかみをおんだ、誠に光沢つやの好い児であつた。いつでも活々いきいきとして元気がよく、其癖気は弱くて憎にく気の少しもない児であつた。

勿論僕とは大の仲好しで、座敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたくと云つては僕の座敷へ這入はいつてくる、私わたしも本が読みたいの手習がしたいのと云う、

たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば来い来いと云うて二人で遊ぶのが何より面白かった。

母からいつでも叱られる。

「又民やは政まよの所へ這入ってるナ。コラアさっさと掃除をやっちゃえ。これからは政の読書の邪魔などしてはいけません。民やは年上の癖に……」

などと頻しきりに小言を云うけれど、其实母も民子をば非常に可愛がって居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……などと時々民子はだだをい

う。そういう時の母の小言も極きまっている。

「お前は手習よか裁縫です。着物が満足に縫えなくては女一人前として嫁にゆかれません」

此頃僕に一点の邪念が無かったは勿論であれど、民子の方にも、いやな考えなどは少しも無かったに相違ない。しかし母がよく小言を云うにも拘かかわらず、民子は猶朝の御飯だ昼の御飯だというては僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入って来て、本を見せろの筆を借せのと云っては暫しばしく遊あそんでいる。其間ひまにも母の薬を持ってきた帰りや、母の用を達した帰りには、きつと僕の所へ

這入ってくる。僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思われた。今日は民さんは何をしているかなと思ひ出すと、ふらふらツと書室を出る。民子を見にゆくと、いうほどの心ではないが、一寸民子の姿が目に触れれば気が落着くのであつた。何のこつたやっぱり民子を見に來たんじやないかと、自分で自分を嘲あざけつた様なことが屢しばしばあつたのである。

村の或家さ瞽女ごぜがとまつたから聴きにゆかないか、祭文さいもんがきたから聴きに行こうのと近所の女共が誘うても、民子は何とか断りを云うて決して家を出ない。隣村

の祭で花火や飾物があるからとの事で、例の向うのお浜や隣のお仙等が大騒ぎして見にゆくというに、内のものらまで民さんも一所に行つて見てきたらと云うても、民子は母の病気を言い前にして行かない。僕も余りそんな所へ出るは嫌であつたから家うちに居る。民子は狐鼠こそこそ々と僕の所へ這入つてきて、小声で、私は内に居るのが一番面白いわと云つてニツコリ笑う。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかつた。

僕が三日置き四日置きに母の薬を取りに松戸へゆく。どうかすると帰りが晩くなる。民子は三度も四度も裏坂

の上まで出て渡しの方を見ていたそうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は真面目になって、お母さんが心配して、見てお出いで見てお出でというからだと言いつ訳をする。家の者は皆ひそひそ笑っているとの話であった。

そういう次第だから、作おんなのお増などは、無上むじようと民子を小面憎がって、何かというと、

「民子さんは政夫さんどこへ許り行きたがる、隙ひまさえあれば政夫さんにこびりついている」

などと頻りに云いはやしたらしく、隣のお仙や向うの

お浜等まで彼かれ是これ噂うわさをする。これを聞いてかあによめ嫂あによめが母に

注意したらしく、或日母は常になくむずかしい顔をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味有り気な小言を云うた。

「男も女も十五六になればもはや児こども供どもではない。お前等

二人が余り仲が好過ぎるとて人が彼是云うそうじや。気をつけなくてはいけない。民子が年かさの癖によくない。

是からはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。

吾わがこ子を許すではないが政は未まだ児こ供どもだ。民まやは十七ではないか。つまらぬ噂をされるとお前の体に疵きずがつく。政夫だつて気をつけろ……。来月から千葉の中学へ行くん

じゃないか」

民子は年が多いし且かつは意味あつて僕の所へゆくであるうと思われたと気がついたか、非常に愧はじ入った様子に、顔真赤にして俯向うつむいている。常は母に少し位小言云われても随分だだをいうのだけれど、此日は只両手をついて俯向うつむいたきり一言もいわない。何の疚やましい所のない僕は頗すこぶる不平で、

「お母さん、そりや余り御無理です。人が何と云ったつて、私等は何の訳もないのに、何か大變悪いことでもした様なお小言じゃありませんか。お母さんだつていつも

そう云ってじやありませんか。民子とお前とは兄弟も同じだ、お母さんの眼からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつでも云ったじやありませんか」

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんないやらしいことを云われようとは少しも思つて居なかつたから、僕の不平もいくらかの理はある。母は俄にわかにやさしくなつて、

「お前達に何の訳もないことはお母さんも知ってるがネ、人の口がうるさいから、只これから少し気をつけてと云うのです」

色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を真から可愛がる笑みが湛^{ただ}えて居る。やがて、

「民やはあの又葉を持ってきて、それから縫掛^{あわせ}けの袷^{あわせ}を今日中に仕上げてしまいなさい……。政は立った次手^{ついで}に花を剪^きって仏壇へ捧^あげて下さい。菊はまだ咲かないか、そんなら紫苑^{しおん}でも切^きってくれよ」

本人達は何の気なしであるのに、人が彼是云うので却^{かえ}って無邪気でいられない様にして終^{しま}う。僕は母の小言も一日しか覚えていない。二三日たつて民さんはなぜ近頃は来ないのか知らんと思つた位であつたけれど、民子の

方では、それからというものは様子がからつと變つて終うた。

民子は其後僕の所へは一切顔出ししない許りでなく、座敷の内で行逢つても、人のいる前などでは容易に物も云わない。何となく極きまりわるそうに、まぶしい様な風で急いで通り過ぎて終う。抛よんどころ処なく物を云うにも、今までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改まつて口をきくのである。時には僕が余り俄に改まったのを可笑おかしがって笑えば、民子も遂には袖で笑いを隠して逃げて終うという風で、とにかく一重ひとえの垣が二人の間に結

ばれた様な気合になった。

それでも或日の四時過ぎに、母の云いつけで僕が背戸なすばたけの茄子畑に茄子をもいで居ると、いつのまにか民子がざる箆ざるを手に持って、僕の後に来ていた。

「政夫さん……」

出し抜けに呼んで笑っている。

「私もお母さんから云いつかって来たのよ。今日の縫物は肩が凝ったろう、少し休みながら茄子をもいできてくれ、明日あした麴こうじ漬づけをつけるからって、お母さんがそう云うから、私飛んできました」

民子は非常に嬉しそうに元気一パイで、僕が、
 「それでは僕が先にきているのを民さんは知らないで来たの」

と云うと民子は、

「知らなくてサ」

にここにこしながら茄子を採り始める。

茄子畑いえというのは、椎森にしきたの下から一重せんざいの藪やぶを通り抜けて、
 家いえより西北にしきたに当る裏せんざいの前まへ栽畑がい。崖がけの上になつてるので、
 利根川は勿論中川までもかすかに見え、武蔵むさし一えんが見
 渡わたされる。秩父ちちぶから足柄箱根の山々、富士の高峯たかねも見え

る。東京の上野の森だと云うのもそれらしく見える。水のように澄みきった秋の空、日は一間半許りの辺に傾いて、僕等二人が立って居る茄子畑を正面に照り返して居る。あたり一体にシンとして又如^{いか}何にもハッキリとした景色、吾等二人は真に画中の人である。

「マア何という好い景色でしょう」

民子も暫く手をやめて立った。

僕はここで白状するが、此時の僕は慥^{たしか}に十日以前の僕ではなかった。二人は決して此時無邪気な友達ではなかった。いつの間にもそういう心持が起って居たか、自分

には少しも判らなかつたが、やはり母に叱られた頃から、僕の胸の中にも小さな恋の卵が幾個か湧きそめて居つたに違いない。僕の精神状態がいつの間にか変化してきたは、隠すことの出来ない事実である。此日始めて民子を女として思ったのが、僕に邪念の萌芽ありし何よりの証拠じや。

民子が体をくの字にかがめて、茄子をもぎつつある其横顔を見て、今更のように民子の美しく可愛らしさに気がついた。これまでも可愛らしいと思わぬことはなかつたが、今日はしみじみと其美しさが身にしみた。しな

やかに光沢つやのある鬢びんの毛につつまれた耳たぼ、豊かな頬の白く鮮かな、顎あごのくくしめの愛らしさ、頸くびのあたり如何にも清げなる、藤色の半襟や花染の襷たすきや、それらがハジメ悉ことごとく優美に眼にとまった。そうなると恐ろしいもので、物を云うにも思い切った言ことは云えなくなる、羞はづかしくなる、極りが悪くなる、皆例の卵の作用から起ることであろう。

ここ十日許ほど仲垣の隔てが出来て、ロクロク話もせなかつたから、これも今までならば無論そんな事考えもせぬに極って居るが、今日はここで何か話さねばならぬ様な

気がした。僕は始め無造作に民さんと呼んだけれど、跡は無造作に詞ことばが継がない。おかしく喉のどがつまって声が出ない。民子は茄子を一つ手に持ちながら体を起し、

「政夫さん、何なに……」

「何でもないけど民さんは近頃へんだからさ。僕なんかすっかり嫌いになったようなもの」

民子はさすがに女にょしやう性で、そういう事には僕などより遥はるかに神経が鋭敏になっている。さも口惜くちおしそうな顔して、つと僕の側そばへ寄ってきた。

「政夫さんはあんまりだわ。私がいっ政夫さんに隔てを

しました……」

「何さ、此頃民さんは、すっかり変っちゃまって、僕なんかには用はないらしいからよ。それだって民さんに不足を云う訳ではないよ」

民子はせきこんで、

「そんな事いうはそりや政夫さんひどいわ。御無理だわ。此間は二人を並べて置いて、お母さんにあんなに叱られたじやありませんか。あなたは男ですから平気でお出でだけど、私は年は多いし女ですもの、あア云われては実に面目がないじやありませんか。それですから、私

は一生懸命になつてたしなんで居るんでさ。それを政夫さん隔てるの嫌になつたらうのと云うんだもの、私はほんとにつまらない……」

民子は泣き出しそうな顔つきで僕の顔をじいツと視ている。僕も只話の小口にそう云うたままでであるから、民子に泣きそうになられては、かわいそうに氣の毒になつて、

「僕は腹を立って言ったでは無いのに、民さんは腹を立ったの……僕は只民さんが俄に變つて逢つても口もきかず、遊びにも来ないから、いやに淋しく悲しくなつちま

ったのさ。それだからこれも時々は遊びにお出でよ。お母さんに叱られたら僕が咎とがを背負うから……人が何と云ったってよいじゃないか」

何というても児供だけに無茶なことをいう。無茶なことを云われて民子は心配やら嬉しいやら、嬉しいやら心配やら、心配と嬉しいとが胸の中で、ごったになって争うたけれど、とうとう嬉しい方が勝を占めて終った。猶三言四言話をするうちに、民子は鮮かな曇りのない元の元気になった。僕も勿論愉快が溢あふれる……、宇宙間に只二人きり居るような心持にお互になったのである。やが

て二人は茄子のもぎくらをする。大きな畑はただけれど、十月の半過ぎなかばすでは、茄子もちらほらしかなくて居ない。二人で漸ようやく二升許り宛ずつを採り得た。

「まあ民さん、御覧なさい、入日の立派なこと」

民子はいつしか箆を下へ置き、両手を鼻の先に合せて太陽を拝んでいる。西の方の空は一体に薄紫にぼかした様な色になった。ひた赤く赤い許りで光線の出ない太陽が今其半分を山に埋めかけた処、僕は民子が一心入日を拝むしおらしい姿が永く眼に残ってる。

二人が余念なく話をしながら帰ってくると、背戸口の

四つ目垣の外にお増がぼんやり立って、こっちを見て居る。民子は小声で、

「お増が又何とか云いますよ」

「二人共お母さんに云いつかって来たのだから、お増なんか何と云ったって、かまやしないさ」

一事件を経るふ度に二人が胸中に湧いた恋の卵は層かさを増してくる。機に触れて交換する双方の意志は、直ただちに互いの胸中にある例の卵に至大な養分を給与する。今日の日暮は慥に其機であった。ぞつと身振いをする程、著しき徴候を現したのである。しかし何というても二人の関

係は卯時代で極めて取りとめがない。人に見られて見苦しい様なこともせず、顧みて自ら疚しい様なこともせぬ。従つてまだまだ暢気のんきなもので、人前を繕うと云う様な心持は極めて少なかった。僕と民子との関係も、此位で最終いになったならば、十年忘れられないという程にはならなかっただろうに。

親というものは何処どこの親も同じで、吾子をいつまでも児供のように思っている。僕の母なども其一人いちにんに漏れない。民子は其後時折僕の書室へやってくるけれど、余程人目を計らつて気ぼねを折ってくる様な風で、いつきて

も少しも落着かない。先に僕に厭味いやみを云われたから仕方なしにくるかとも思われたが、それは間違っていた。僕等二人の精神状態は二三日と云われぬ程著しき変化を遂げている。僕の変化は最も甚しい。三日前には、お母さんが叱れば私が科とがを背負うから遊びにきてとまで無茶を云うた僕が、今日はとてもそんな訳のものでない。民子が少し長居をすると、もう気が咎めて心配でならなくなつた。

「民さん又お出でよ、余り長く居ると人がつまらぬことを云うから」

民子も心持は同じだけれど、僕にもう行けと云われると妙にすねだす。

「アレあなたは先このあいだ日何と云いました。人が何と云ったツてよいから遊びに來いと云いはしませんか。私はもう人に笑われてもかまいませんの」

困った事になった。二人の關係が密接する程、人目を恐れてくる。人目を恐れる様になつては、もはや罪惡を犯しつつあるかの如く、心もおどおどするのであつた。母は口でこそ、男も女も十五六になれば兎供ではないと云つても、それは理窟りくつの上のことで、心持ではまだまだ

二人をまるで兎供の様に思っているから、其後のち民子が僕
の室へやへきて本を見たり話をしたりしているのを、直ぐ前
を通りながら一向気に留める様子もない。此間の小言も
実は嫂が言うから出たままで、ほんとうに腹から出た小
言ではない。母の方はそうであつたけれど、兄や嫂やお
増などは、盛さかんに蔭言かげごとをいうて笑つていたらしく、村中
の評判には、二つも年の多いのを嫁にする気かしらんな
どと専もっぱらいうているとの話。それやこれやのことが薄々
二人に知れたので僕から言いだして当分二人は遠ざかる
相談をした。

人間の心持というものは不思議なもの。二人が少しも
隔意なき得心上の相談であったのだけれど、僕の方から
言い出した許りに、民子は妙に鬱ふさぎ込んで、まるで元氣
がなくなり、悄然しょうぜんとしているのである。それを見ると
僕もまたたまらなく氣の毒になる。感情の一進一退はこ
んな風にもつれつつ危あやうくなるのである。とにかく二人
は表面だけは立派に遠ざかって四五日を経過した。

陰曆の九月十三日、今夜が豆の月だという日の朝、露
霜が降りたと思うほどつめたい。其替り天気はきらきら

している。十五日が此村の祭で明日は宵祭あしたという訳故わけゆえ、野の仕事も今日一渡り極りをつけねばならぬ所から、家中手分けをして野へ出る事になった。それで甘露的恩命が僕等ふたり兩人なかにんに下ったのである。兄夫婦とお増と外に男一人とは中稻なかにんの刈残りを是非刈って終わねばならぬ。民子は僕を手伝いとして山畑の棉わたを採ってくる事になった。これは固もとより母の指図で誰にも異議は云えない。「マアあの二人を山の畑へ遣やるツて、親というものはよッぽどお目出たいものだ」

奥底のないお増と意地曲りの嫂とは口を揃そろえてそう云

ったに違いない。僕等二人は固より心の底では嬉しいに
 相違ないけれど、此場合二人で山畑へゆくとなつては、
 人に顔を見られる様な気がして大いに極りが悪い。義理
 にも進んで行きたがる様な素振りには出来ない。僕は朝飯あさはん
 前は書室を出ない。民子も何か愚図々々して仕度もせぬ
 様子。もう嬉しがつてと云われるのが口惜くちおしいのである。
 母は起きてきて、

「政夫も仕度しろ。民やもさっさと仕度して早く行け。
 二人でゆけば一日には楽な仕事だけれど、道が遠いのだ
 から、早く行かないと帰りが夜になる。なるたけ日の暮

れない内に帰ってくる様によ。お増は二人の弁当を拵こしらえてやってくれ、お菜はこれこれの物で……」

まことに親のころだ。民子に弁当を拵えさせては、自分ののであるから、お菜などはロクな物を持って行かないと気がついて、ちやんとお増に命じて拵えさせたのである。僕はズボン下に足袋たび裸足はだし麦藁帽むぎわらぼうという出で立ち、民子は手指てさしを佩はいて股引ももひきも佩いてゆけと母が云うと、手指許り佩いて股引佩くのにくずくずしている。民子は僕のところへきて、股引佩かないでもよい様にお母さんにそう云ってくれと云う。僕は民さんがそう云いなさいと

云う。押問答をしている内に、母はききつけて笑いながら、

「民やは町場者まちばものだから、股引佩くのは極りが悪いかい。私は又お前が柔かい手足へ、茨いばらや薄すすきで傷をつけるが可哀相だから、そう云ったんだが、いやだと云うならお前のすきにするがよいさ」

それで民子は、例の襷たすきに前掛姿で麻裏草履あしぞりという仕度、二人が一斗ひとつづつ筧かたかご一個宛てんびんを持ち、僕が別に番ばんニヨすげがさ片かたかご籠てんびんと天秤てんびんとを肩にして出掛ける。民子が跡あとから菅笠すげがさを被かむって出ると、母が笑声で呼びかける。

「民や、お前が菅笠を被って歩くと、丁度木の子が歩くように見つともない。編笠がよかろう。新らしいのが一つあつた筈だ」

稲刈連は出てしまつて別に笑うものもなかつたけれど、民子はあわてて菅笠を脱いで、顔を赤くしたらしかった。今度は編笠を被らずに手に持つて、それじゃお母さんいつてまいりますと挨拶して走つて出た。

村のものらも彼是いうと聞いてるので、二人揃うてゆくも人前恥かしく、急いで村を通り抜けようとの考えから、僕は一足先になつて出掛ける。村はずれの坂の降口おりくち

の大きな銀杏いちようの樹の根で民子のくるのを待った。ここから見おろすと少しの田圃たんぼがある。色よく黄ばんだ晩稻おしねに露をおんで、シットリと打伏した光景は、気のせいか殊すがすがに清々しく、胸のすくような眺めである。民子はいつの間にか来ていて、昨日の雨で洗い流した赤土の上に、
二葉三葉銀杏ふたはみはの葉の落ちるのを拾っている。
「民さん、もうきたかい。此天氣のよいことどうです。ほんとに心持のよい朝だね」
「ほんとに天氣がよくて嬉しいわ。このまア銀杏の葉の綺麗きれなこと。さア出掛けましょう」

民子の美しい手で持つてると銀杏の葉も殊に綺麗に見える。二人は坂を降りて漸く窮屈な場所から広場へ出た気になった。今日は大いそぎで棉を採り片付け、さんざん面白いことをして遊ぼうなどと相談しながら歩く。道の真中は乾いているが、両側の田についている所は、露にしとしとに濡れて、いろいろの草が花を開いてる。夕ウコギは末枯うらがれて、水蕎麦みずそばなど一番多く繁っている。都草も黄色く花が見える。野菊がよろよろと咲いている。民さんこれ野菊がと僕は吾知らず足を留めたけれど、民子は聞えないのかさつさと先へゆく。僕は一寸脇へ物を

置いて、野菊の花を一握り採った。

民子は一町ほど先へ行ってから、気がついて振り返るや否や、あれツと叫んで駆け戻ってきた。

「民さんはそんなに戻ってきかないツだって僕が行くものを……」

「まあ政夫さんは何をしていたの。私びツくりして……まあ綺麗な野菊、政夫さん、私に半分おくれツたら、私ほんとうに野菊が好き」

「僕はもとかから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

「私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振いの出るほど好^{この}もしいの。どうしてこんなかと、自分でも思う位」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」

民子は分けてやった半分の野菊を顔に押しあてて嬉しがつた。二人は歩きだす。

「政夫さん……私野菊の様だってどうしてですか」

「さアどうしてということはないけど、民さんは何かなし野菊の様な風だからさ」

「それで政夫さんは野菊が好きだって……」

「僕大好きさ」

民子はこれからはあなたが先になつてと云いながら、自らは後になつた。今の偶然に起つた簡単な問答は、お互の胸に強く有意味に感じた。民子もそう思つた事は其素振りで解る。ここまで話が迫ると、もう其先を言い出すことは出来ない。話は一寸途切れてしまつた。

何と言つても若いふたり兩人は、今罪の神にほんろう翻弄せられつつあるのだけれど、野菊の様な人だと云つた詞ことばについて、其野菊を僕はだい好きだと云つた時すら、僕は既に胸に

動悸どうきを起した位で、直ぐにそれ以上を言い出すほどに、まだまだずうずうしくはなっていない。民子も同じこと、物に突きあたった様な心持で強くお互に感じた時に声はつまってしまつたのだ。二人は暫く無言で歩く。

真まことに民子は野菊の様な児であつた。民子は全くの田舎風ではあつたが、決して粗野ではなかつた。可憐かれんで優しく、そして品格もあつた。厭味とか憎気にくげとかいう所は爪あかの垢あかほどもなかつた。どう見ても野菊の風だつた。暫くは黙っていたけれど、いつまで話もしないでいるは猶おかしい様に思つて、無理と話を考え出す。

「民さんはさつき何を考えてあんなに脇見もしないで歩いていたの」

「わたし何も考えていやしません」

「民さんはそりや嘘だよ。何か考えごとでもしなくてあんな風をする訳はないさ。どんなことを考えていたのか知らないけれど、隠さないだってよいじゃないか」

「政夫さん、済まない。私さつきほんとに考かんがえごと事して

いました。私つくづく考えて情なくなつたの。わたしはどうして政夫さんよか年が多いんでしょう。私は十七だと言うんだもの、ほんとに情なくなるわ……」

「民さんは何のこと言うんだらう。先に生れたから年が多い、十七年育ったから十七になったのじゃないか。十七だから何で情ないのですか。僕だって、さ来年になれば十七歳さ。民さんはほんとに妙なことを云う人だ」

僕も今民子が言ったことの心を解せぬほどの児供でもない。解つてはいるけど、わざと戯れの様^にに聞きなして、振りかえつて見ると、民子は真^{しん}に考え込んでいる様であったが、僕と顔合せて極りわるげに^{にわか}遽^にに側^{わき}を向いた。こうなつてくると何をいうても、直ぐそこへ持つてくるので話がゆきつまつてしまふ。二人の内^{うち}でどちらか一

人が、すこうしほんの僅かにても押おしが強ければ、こんな話に話がゆきつままるのではない。お互に心持は奥底まで解っているのだから、吉野紙を突破するほどにも力がありさえすれば、話の一步を進めてお互に明放あけはなしてしまうことが出来るのである。しかし真底からおぼこな二人は、其吉野紙を破るほどの押がないのである。又ここで話の皮を切ってしまうわねばならぬと云う様な、ハツキリした意識も勿論ないのだ。言わば未まだ取止めのない卵らんてき的の恋であるから、少しく心の力が必要な所へくると話がゆきつまってしまうのである。

お互に自分で話し出しては自分が極りわるくなる様なことを繰返しつつ幾町かの道を歩いた。詞数こそ少なけれ、其詞の奥には二人共に無量の思いを包んで、極りがわるい感情の中うちには何とも云えない深き愉快を湛えて居る。それで所謂足いも空わゆるに、いつしか田圃も通りこし、山路やまじへ這入った。今度は民子が心を取り直したらしく鮮かな声で、

「政夫さん、もう半分道来ましてしようか。大長柵おおながさくへは一里に遠いつて云いましたねイ」

「そうです、一里半には近いそうだが、もう半分の余来

ましたろうよ。少し休ましましょうか」

「わたし休まなくとも、ようございませうが、早速お母さんの罰があたって、薄の葉でこんなに手を切りました。ちよいとこれで結わえて下さいな」

親指の中程で疵は少しだが、血が意外に出た。僕は早速紙を裂いて結わえてやる。民子が両手を赤くしているのを見た時非常にかわいそうであった。こんな山の中で休むより、畑へ往いってから休もうというので、今度は民子を先に僕が後になって急ぐ。八時少し過ぎと思う時分に大長柵の畑へ着いた。

十年許り前に親父が未だ達者な時分、隣村の親戚から頼まれて余儀なく買ったのだそうで、畑が八反と山林が二町ほどここにあるのである。此辺一体に高台は皆山林で其間の柵が畑になって居る。越石こしこくを持ってしていると云えば、世間体はよいけど、手間許り掛って割に合わないといつも母が言ってる畑だ。

三方林で囲まれ、南が開いて余所よその畑とつづいている。北が高く南が低い傾斜こうばうになっている。母の推察通り、棉は末にはなっているが、風が吹いたら溢れるかと思うほど棉はえんでいる。点々として畑中白くなっている其棉

に朝日がさしていると目まぶしい様に綺麗だ。

「まあよくえんでること。今日採りにきてよい事しました」

民子は女だけに、棉の綺麗にえんでるのを見て嬉しうにそう云った。畑の真中程に桐の樹が二本繁っている。葉が落ちかけて居るけれど、十月の熱を凌しのぐには充分だ。ここへあたりの黍きび殻がらを寄せて二人が陣どる。弁当包みを枝へ釣る。天気の良いのに山路を急いだから、汗ばんで熱い。着物を一枚ずつ脱ぐ。風を懐ふところへ入れ足を展のびして休む。青ぎった空に翠みどりの松林、百舌もずも何処かで鳴いて

いる。声の響くほど山は静かなのだ。天と地との間で広い畑の真ん中に二人が話をしているのである。

「ほんとに民子さん、きょうというきょうは極楽の様な日ですね」

顔から頸から汗を拭いた跡のつやつやしさ、今更に民子の横顔を見た。

「そうですねイ、わたし何だか夢の様な気がするの。今朝家うちを出る時はほんとに極りが悪くて……あによめ 嫂あによめさんには変な眼つきで視られる、お増には冷かされる、私のはのぼせてしまいました。政夫さんは平気でいるから憎らしか

「たわ」

「僕だって平気なもんですか。村の奴らに逢うのがいやだから、僕は一足先に出て銀杏の下で民さんを待っていたんです。それはそうと、民さん、今日はほんとに面白く遊ぼうね。僕は来月は学校へ行くんだし、今月とて十五日しかないし、二人でしみじみ話の出来る様なことは是から先はむずかしい。あわれッぽいこと云うようだけど、二人の中も今日だけかしらと思うのよ。ねイ民さん……」

「そりゃア政夫さん、私は道々それ許り考えて来まし

た。私がさつき、ほんとに情なくなつてと言つたら、政夫さんは笑つておしまいなしたけど……」

面白く遊ぼう遊ぼう言うても、話を始めると直ぐにこ
うなつてしまふ。民子は涙を拭うた様であつた。丁度よ
くそこへ馬が見えてきた。西側の山路から、がさがさ笹
にさわる音がして、薪たきぎをつけた馬を引いて頬ほ冠おかむりの男が
出て来た。よく見ると意外にも村の常吉である。此の奴
はいつか向うのお浜に民子を遊びに連れだしてくれと頻しき
りに頼んだという奴だ。いやな野郎がきやがったなと思
うていと、

「や政夫さん、コンチャどうも結構なお天気ですな。今日は御夫婦で棉採りかな。酒し落やれてますね。アハハハハハ」

「オウ常さん、今日は駄賃かな。大変早く御精が出ますね」

「ハア吾々なんざア駄賃取りでもして適たまに一盃いっぱいやるより外に楽しみもないんですからな。民子さん、いやに見せつけますね。余あんまり罪ですぜ。アハハハハハ」

此野郎失敬なと思ったけれど、吾々も余り威張れる身でもなし、笑いとぼけて常吉をやり過ごした。

「馬鹿野郎、実に厭なやつだ。さア民さん、始めましよう。ほんとに民さん、元氣をお直しよ。そんなにくよくよおしでないよ。僕は学校へ行つたて千葉だもの、盆正月の外にも来ようと思えば土曜の晩かけて日曜に来られるさ……」

「ほんとに済みません、泣面などして。あの常さんて男、何といういやな人でしよう」

民子は襷掛け僕はシャツに肩を脱いで一心に採つて三時間許りの間に七分通り片づけてしまった。もう跡はわけがないから弁当にしようということにして桐の蔭に戻

る。僕はかねて用意の水筒すいづつを持って、

「民さん、僕は水を汲くんで来ますから、留守番を頼みま
す。帰りに『えびづる』や『あけび』をうんと土産に採
って来ます」

「私は一人で居るのはいやだ。政夫さん、一所に連れて
って下さい。さっきの様な人にでも来られたら大変です
もの」

「だって民さん、向うの山を一つ越して先ですよ、清水
のある所は。道という様な道もなく、それこそ茨や薄
で足が疵だらけになりますよ。水がなくちや弁当が食べ

られないから、困ったなア、民さん、待っていられますでしよう」

「政夫さん、後生だから連れて行って下さい。あなたが歩ける道なら私にも歩けます。一人でここにいるのはわたしやどうしても……」

「民さんは山へ来たたら大変だだツ児になりましたネー。それじゃ一所に行きましょう」

弁当は棉の中へ隠し、着物はてんでに着てしまつて出掛ける。民子は頻りに、にこにこしている。端はたから見たならば、馬鹿馬鹿しくも見苦しくもあるうけれど、本人

同志の身にとっては、其のらちもなき押問答の内にも限りなき嬉しみを感ずるのである。高くもないけど道のな
い所をゆくのであるから、笹原を押分け樹の根につかま
り、崖を攀よずる。屢しばしば民子の手を採ひって曳ひいてやる。

近く二三日以来の二人の感情では、民子が求めるならば僕はどんなことでも拒まれない。又僕が求めるならばりどんなことでも民子は決して拒まみはしない。そうい
う間柄ふたりでありつつも、飽くまで臆病に飽くまで気の小さな
二人は、嘗かつて一度も有意味に手などを採ひったことはな
かった。然るに今日は偶然の事から屢手を採ひり合うに至

った。這^{このへん}辺の一種云うべからざる愉快な感情は経験ある人にして始めて語る事が出来る。

「民さん、ここまですれば、清水はあすこに見えます。是から僕が一人で行って来るからここに待つて居なさい。僕が見えて居たら居られるでしょう」

「ほんとに政夫さんの御厄介ですね……そんなにだだを言つては濟まないから、ここで待ちましょう。あらア野^{えびづる}葡萄があつた」

僕は水を汲んでの歸りに、水筒は腰に結いつけ、あたりを少し許り探つて、「あけび」四五十と野^{ひと}葡萄一もく

さを採り、竜胆りんどうの花の美しいのを五六本見つけて帰ってきた。帰りは下りだから無造作に二人で降りる。畑へ出口で僕は春蘭しゅんらんの大きいのを見つけた。

「民さん、僕は一寸『アツクリ』を掘ってゆくから、此の『あけび』と『えびづる』を持って行って下さい」

「『アツクリ』て何にいい。あらア春蘭じゃありませんか」

「民さんは町場もんですから、春蘭などと品のよいこと仰おっしやるのです。矢切の百姓なんぞは『アツクリ』と申しましてね、鞞ひびの薬に致します。ハハハハ」

「あらア口の悪いこと。政夫さんは、きようはほんとに

口が悪くなつたよ」

山の弁当と云えば、土地の者は一般に楽しみの一つとしてある。何か生理上の理由でもあるか知らんが、とにかく、山に仕事をしてやがてたべる弁当が不思議とうまいことは誰も云う所だ。今吾々二人は新らしき清水を汲み来り母の心を籠めた弁当を分けつつたべるのである。興味の尋常でないは言うも愚^{おろか}な次第だ。僕は「あけび」を好み民子は野葡萄をたべつつ暫く話をする。民子は笑いながら、「政夫さんは鞆の薬に『アツクリ』とやらを採ってきて学校へお持ちになるの。学校で鞆がきれいなら

おかしいでしょうね……」

僕は真面目に、

「なアにこれはお増にやるのさ。お増はもう遠とおに鞆を切らしているでしょう。此間も湯に這入はいる時にお増が火を焚たきにきて非常に鞆を痛がっているから、其内に僕が山へ行ったら『アツクリ』を採ってきてやると言ったのさ」

「まああなたは親切な人ですことね……お増は蔭日向かげひなたのない憎気のない女ですから、私も仲好くしていたんですが、此頃は何となし私に突き当る様な事ばかり言っ、何でもわたしを憎んでいますよ」

「アハハハ、それはお増どんが焼餅をやくのでさ。つ
まらんことにもすぐ焼餅を焼くのは、女の癖さ。僕がそ
ら『アツクリ』を採っていってお増にやると云えば、民
さんがすぐに、まアあなたは親切な人とか何とか云うの
と同じ訳さ」

「此人はいつのまにこんな口がわるくなつたのでし
よう。何を言っても政夫さんにはかないやしない。いく
ら私だつてお増が根も底もない焼もちだ位は承知してい
ますよ……」

「実はお増も不憫ふびんな女よ。両親があんなことになりさ

えせねば、奉公人とまでなるのではない。親父は戦争で死ぬ、お袋は之これを嘆いたがもとでの病死、一人の兄がはずれものという訳で、とうとうあの始末。国家の為ために死んだ人の娘だもの、民さん、いたわってやらねばならない。あれでも民さん、あなたをば大変ほめているよ。意地曲りのあによめ 嫂あによめ にこきつかわれるのだから一層かわいそうでさ」

「そりや政夫さん、私もそう思っ居ますさ。お母さんもよくそうおツしやいました。つまらないものですけど何とかかとか分けてやっていますが、又政夫さんの様に

情なさけぶか深くされると……」

民子は云いさして又話を詰まらしたが、桐の葉に包んで置いた竜胆の花を手に採って、急に話を転じた。

「こんな美しい花、いつ採ってお出でなして。りんどうはほんによい花ですね、わたしりんどうがこんなに美しいとは知らなかったわ。わたし急にりんどうが好きになった。おオえ工花……」

花好きな民子は例の癖で、色白の顔に其の紫紺の花を押しつける。やがて何を思いだしてか、ひとりでにこにこ笑いだした。

「民さん、なんです、そんなにひとりで笑って」

「政夫さんはりんどうの様な人だ」

「どうして」

「さアどうしてということはないけど、政夫さんは何がなしに竜胆の様な風だからさ」

民子は言い終って顔をかくして笑った。

「民さんも余程人よっぽどが悪くなつた。それでさっきの仇討あだうちと
いう訳ですか。口真似なんか恐入りますナ。しかし民さ
んが野菊で僕が竜胆とは面白い対ついでですね。僕は悦んで
りんどうになります。それで民さんがりんどうを好きにな

つてくれれば猶なほ嬉しい」

二人はこんならちもなき事いうて悦んでいた。秋の日の短さ、日は漸く傾きそめる。さアとの掛声で棉もぎにかかる。午後の分は僅であつたから一時間半許ばかりでもぎ終えた。何やかやそれぞれまとめて番二ヨに乗せ、二人で差しあいにかつぐ。民子を先に僕が後に、とぼとぼ畑を出掛けた時は、日は早く松の梢こずえをかぎりかけた。半分道も来たと思う頃は十三夜の月が、木の間まから影をさして尾花にゆらぐ風もなく、露の置くさえ見える様な夜になつた。今朝は気がつかかなかつたが、道の西手に

一段低い畑には、蕎麦そばの花が薄絹を曳き渡したように白く見える。こおろぎが寒げに鳴いているにも心とめずにはいられない。

「民さん、くたぶれたでしょう。どうせおそくなつたんですから、此景色のよい所で少し休んで行きましょう」
「こんなにおそくなるなら、今少し急げばよかつたに。家の人達にきつと何とか言われる。政夫さん、私はそれが心配になるわ」

「今更心配しても追おっつかないから、まア少し休みましよう。こんなに景色のよいことは滅多にありません。そん

なに人に申訳のない様な悪いことはしないもの、民さん、心配することははないよ」

月あかりが斜ななめにさしこんでいる道端の松の切株に二人は腰をかけた。目の先七八間の所は木の蔭で薄暗いが、それから向うは畑一ぱいに月がさして、蕎麦の花が際立って白い。

「何というえい景色でしょう。政夫さん、歌とか俳句とかいうものをやったら、こんなときに面白いことが云えるでしょうね。私ようら様な無筆むひつでもこんな時には心配も何も忘れますもの。政夫さん、あなた歌をおやんなさいよ」

「僕は実は少しやっているけど、むずかしくて容易に出来ないので。山畑の蕎麦の花に月がよくて、こおろぎが鳴くなどは実にえいですなア。民さん、これから二人で歌をやりましょうか」

お互に一つの心配を持つ身となった二人は、内に思うことが多くて却って話は少ない。何となく覚束おぼつかない二人の行末、ここで少しく話をしたかったのだ。民子は勿論のこと、僕よりも一層話したかったに相違ないが、年の至らぬのと浮いた心のない二人は、なかなか差向いでそんな話は出来なかった。暫しばしばくは無言でぼんやり時間を

過ぎすうちに、一列の雁かりが二人を促すかの様に空近く鳴いて通る。

漸く田圃へ降りて銀杏の木が見えた時に、二人は又同じ様に一種の感情が胸に湧いた。それは外でもない、何となく家に這入りづらいつらいつらという心持である。這入りづらいつらいつらと思つても、どうしても這入りづらいつらいつらする暇もない、たちまち 忽 門前近く来てしまった。

「政夫さん……あなた先になつて下さい。私きま極りわるくてしようがないわ」

「よし、それじゃ僕が先になろう」

僕は頗すこぶる勇氣を鼓し殊に平氣な風を装うて門を這入った。家の人達うちは今夕飯最中で盛んに話が湧わいでいるらしい。庭場の雨戸は未だ開あいたなりに月が軒口迄までさし込んでいる。僕が咳せき払ばらいを一ツやつて庭場へ這入ると、台所の話は俄にわかに止やんでしまった。民子は指の先で僕の肩を撞ついた。僕も承知しているのだ、今御膳會議で二人の樽が如何に盛んであつたか。

宵祭ではあり十三夜ではあるので、家中表座敷へ揃うた時、母も奥から起きてきた。母は一通り二人の余り遅かつた事を咎めて深くは言わなかつたけれど、常とは全

く違っていた。何か思つて居るらしく、少しも打解けない。これまでは口には小言を言うても、心中に疑いはなかつたのだが、今夜は口には余り言わないが、心では充分に二人に疑いを起したに違いない。民子は愈いよいよ小さくなつて座敷中なかへは出ない。僕は山から採つてきた、あけびや野葡萄やを沢山座敷中じゅうへ並べ立てて暗に、僕がこんな事をして居たから遅くなつたのだとの意を示し無言の弁解をやつても何のききめもない。誰一人それをそうと見るものはない。今夜は何の話にも僕等二人は除のけものにされる始末で、もはや二人は全く罪あるものと黙決

されて了しまったのである。

「お母さんがあんまり甘過ぎる。あアして居る二人を一所に山畑へやるとは目のないにも程がある。はたでいくら心配してもお母さんがあれでは駄目だ」

これが台所会議の決定であつたらしい。母の方でも何時いつ迄児供と思つていたが誤りで、自分が悪かつたという様な考えに今夜はなつたのである。今更二人を叱つて見ても仕方がない。なに政夫を学校へ遣やつてしまひさえせば仔細しさいはないと母の心はちやんと極きまつて居るらしく、

「政や、お前は十一月へ入って直ぐ学校へやる積りであつたけれど、そうしてぶらぶらして居ても為にならな
いから、お祭が終しまつたら、もう学校へゆくがよい。十七
日にゆくとしろ……えいか、其そのつもりで小仕度して置
け」

学校へゆくは固より僕の願い、十日や二十日早くとも
遅くともそれに仔細はないが、此場合この然しかも今夜言いい渡わたしが
あつて見ると、二人は既に罪を犯したものと定めきられて
の仕置であるから、民子は勿論僕に取つても頗る心苦し
い処がある。實際二人はそれ程に墮落した訳でないから、

頭からそうと極められては、聊いささかか妙な心持がする。さりとして弁解の出来ることでもなし、又強いことを言える資格も実は無いのである。是れが一カ月前であつたらば、それはお母さん御無理だ、学校へ行くのは望みであるけど、科とがを着せられての仕置に学校へゆけとはあんまりでしよう……などと直ぐだだを言うのであるが、今夜はそんな我儘わがままを言える程無邪気ではない。全くの処、恋に陥ってしまっている。

あれほど可愛がられた一人の母に隠立てをする、何となく隔てを作って心の有りたけを言い得ぬまでになつて

いる。おのずから人前を憚り^{はばか}、人前では殊更に二人が
 うとうとしく取りなす様になっている。かくまで私^{わたくし}心
 が長じてきてどうして立派な口がきけよう。僕は只一言^{いちごん}、
 「はア……」

と答えたきりなんにも言わず、母の言いつけに盲従す
 る外はなかった。

「僕は学校へ往つて了えばそれでよいけど、民さんは跡
 でどうなるだろうか」

不^ふ凶^とそう思って、そつと民子の方を見ると、お増が枝
 豆をあさつてる後に、民子はうつむいて膝の上に襷^{たすき}を

こねくりつつ沈黙している。如何にも元氣のない風で夜のせいか顔色も青白く見えた。民子の風を見て僕も俄に悲しくなつて泣きたくなつた。涙はまぶた瞼をつたわ伝つて眼が曇つた。何ぜ悲しくなつたか理由ははんぜん判然しない。只民子が可哀相でならなくなつたのである。民子と僕との楽しい関係も此日の夜までは続かなく、十三日の昼の光と共に全く消えうせて了つた。嬉しいにつけても思ひのたけは語りつくさず、憂き悲しいことに就つけては勿論百分の一だも語りあわないで、二人の関係は闇の幕に這入つて了つたのである。

十四日は祭の初日で只物せわしく日がくれた。お互に気のない風はしていても、手にせわしい仕事のあるばかりに、とにかく思い紛らすことが出来た。

十五日と十六日とは、食事の外用事もないままに、書室へ籠こもりとおしていた。ぼんやり机にもたれたなり何をするでもなく、又二人の関係をどうしようかという様なことすらも考えてはいない。只民子のことが頭に充ちている許りで、極めて単純に民子を思っている外に考えは働いて居らぬ。此二日の間に民子と三四回は逢ったけれ

ど、話も出来ず微笑を交換する元気もなく、うら淋しい心持を互に目に訴うるのみであつた。二人の心持が今少しませて居つたならば、此二日の間にも将来の事など随分話し合うことが出来たのであろうけれど、しぶとい心持などは毛程もなかつた二人には、其場合になかなかそんな事は出来なかつた。それでも僕は十六日の午後になつて、何とはなしに以下のような事を巻紙へ書いて、日暮に一寸来た民子にちよつと僕が居なくなつてから見てくれと云つて渡した。

朝からここへ這入つたきり、何をする気にもならな

い。外へ出る気にもならず、本を読む気にもならず、只繰返し繰返し民さんの事許り思つて居る。民さんと一所に居れば神様に抱かれて雲にでも乗つて居る様だ。僕はどうしてこんなになつたんだらう。学問をせねばならない身だから、学校へは行くけれど、心では民さんと離れたくない。民さんは自分の年の多いのを気にしているらしいが、僕はそんなことは何とも思わない。僕は民さんの思うとおりになるつもりですから、民さんもそう思つていて下さい。明日は早く立ちます。あした冬期の休みには帰つてきて民さんに逢うのを楽しみに

して居ります。

十月十六日政 夫

民 子 様

学校へ行くとは云え、罪があつて早くやられると云う境遇であるから、人の笑声話声にも一々ひがみ心が起きる。皆二人に対する嘲ちやうしやう笑かのように聞かれる。いつそ早く学校へ行つてしまいたくなつた。決心が定きまれば元氣も恢復かいふくして来る。此夜は頭も少しくさえて夕飯ゆうめしも心持よくだべた。学校の事何くれとなく母と話をする。やがて寝しんに就いてからも、

「何だ馬鹿々々しい、十五かそこらの小僧の癖に、女の事など許りくよくよ考えて……そうだそうだ、明朝あしたは早速学校へ行こう。民子は可哀相だけれど……もう考えま

い、考えたって仕方がない、学校々々……」
 独ひとりぐち口ききつつ眠りに入った様な訳であつた。

船で河から市川へ出るつもりだから、十七日の朝、小雨の降るのに、一切の持物をカバンひとつ一個につめ込み民子とお増に送られて矢切やぎりの渡わたしへ降りた。村の者の荷船に便乗する訳でもう船は来て居る。僕は民さんそれじ

や……と言うつもりでも咽のどがつままって声が出ない。民子は僕に包を渡してからは、自分の手のやりばに困って胸を撫でたり襟を撫なでたりして、下許り向いている。眼にもつ涙をお増に見られまいとして、体を脇へそらしている。民子があわれな姿を見ては僕も涙が抑え切れなかった。民子は今日を別れと思つてか、髪はさっぱりとしたすすいろ。銀杏返いちようがえしに薄く化粧をしている。煤色すすいろと紺の細かい弁慶縞べんけいしまで、羽織も長着も同じい米沢紬よねざわつむぎに、品のよい友禅縮緬ゆうぜんちりめんの帯をしめていた。襷を掛けた民子もよかつたけれど今日の民子は又一層引立って見えた。

僕の気のせいでもあるか、民子は十三日の夜からは
一日一日とやつれてきて、此日のいたいたしさ、僕は泣
かずには居られなかった。虫が知らせるとでもいうのか、
これが生涯の別れになろうとは、僕は勿論民子とて、よ
もやそうは思わなかったろうけれど、此時のつらさ悲し
さは、とても他人に話しても信じてくれるものはないと
思う位であつた。

尤も民子の思もつといは僕より深かつたに相違ない。僕は
中学校を卒業する迄にも、四五年間のある体であるに、
民子は十七で今年の内にも縁談の話があつて両親からそ

う言われれば、無造作に拒むことの出来ない身であるから、行末の事をいろいろ考えて見ると心配の多い訳である。当時の僕はそこまでは考えなかつたけれど、親しく目に染み民子のいたいたしい姿は幾年経つても昨日の事のように眼に浮いているのである。

余所よそから見たならば、若いうちによくあるいたずらの勝手な泣面なきがおと見苦しくもあつたであろうけれど、二人の身を取っては、真にあわれに悲しき別れであつた。互に手を採つて後来こうらいを語ることも出来ず、小雨のしよぼしよぼ降る渡場に、泣きの涙も人目を憚り、一言の詞ことばもか

わし得ないで永久の別れをしてしまったのである。無情の舟は流を下って早く、十分間と経たぬ内に五町と下らぬ内に、お互の姿は雨の曇りに隔てられて了った。物も言い得ないで、しよんぼりと悄しおれていた不憫な民さんの倂おもかげ、どうして忘れることが出来よう。民さんを思う為に神の怒りに触れて即座に打殺さるる様なことがあるとても僕には民さんを思わずに居られない。年をとつての後の考えから言えば、あアもしたらこうもしたらと思わぬこともなかつたけれど、当時の若い同志の思慮には何等の工夫も無かつたのである。八百屋お七は家を焼いた

らば、再度ふたたび思う人に逢われることと工夫をしたのであるが、吾々二人は妻戸一枚を忍んで開ける程の智恵も出なかつた。それ程に無邪気な可憐な恋でありながら、猶親に怖おじ兄弟に憚り、他人の前にて涙も拭き得なかつたのは如何いかに氣の弱い同志であつたらう。

僕は学校へ行つてからも、とかく民子のことばかり思われて仕方がない。学校に居つてこんなことを考えてどうするものかなどと、自分で自分を叱り励まして見ても何の甲か斐いもない。そういう詞の尻からすぐ民子のことか

湧いてくる。多くの人中に居ればどうにか紛れるので、日の中はなかなるたけ一人で居ない様に心掛けて居た。夜になっても寝ると仕方がないから、なるたけ人中で騒いで居て疲れて寝る工夫をして居た。そういう始末でようや漸く年もくれ冬期休業になった。

僕が十二月二十五日の午前に帰って見ると、庭一面にもみ粃を干してあって、母は前の縁側にふとん蒲団を敷いて日向ぼっこをしていた。近頃は余程体の工合もよい、今日は兄夫婦と男とお増とは山へ落葉くずをはきに行ったとの話である。僕は民さんとは口の先まで出たけれど遂に言い切ら

なかつた。母も意地悪く何とも言わない。僕は帰り早々民子のことを問うのが如何にも極り悪く、其のまま例の書室を片づけてここに落着いた。しかし日暮までには民子も帰ってくると思ひながら、おろおろして待つて居る。皆が帰つて愈夕飯ということになつても民子の姿は見えない、誰も又民子のことを一言も言うものもない。僕はもう民子は市川へ帰つたものと察して、人に問うのもいまいましいから、外の話もせず、飯がすむとそれなり書室へ這入つて了つた。

今日は必ず民子に逢われることとひとかた一方ならず楽しみに

して帰って来たのに、此始末で何とも言えず力が落ちて淋しかった。さりとして誰に此苦悶くもんを話しようもなく、民子の写真などを取出して見て居ったけれど、ちつとも気が晴れない。又あの奴民子が居ないから考え込んで居やがると思われるも口惜くちおしく、漸く心を取直し、母の枕元へ行って夜遅くまで学校の話をして聞かせた。

翌あくる日は九時頃に漸く起きた。母は未まだ寝ている。台所へ出て見ると外の者は皆又山へ往ったとかで、お増が一人台所片づけに残っている。僕は顔を洗ったなり飯も食わずに、背戸の畑へ出てしまった。此秋、民子と二

人で茄子なすをとった畑が今は青々と菜がほきている。僕は暫く立って何所いずこを眺めるともなく、民子の俵を脳中にえがきつつ思いに沈んでいる。

「政夫さん、何をそんなに考えているの」

お増が出し抜けうしろに後からそいって、近くへ寄ってきてきた。僕がよい加減なことを一言二言いうと、お増はいきなり僕の手をとって、もう少しこっちへきてここへ腰を掛けなさいまアと言いつつ、藁わらを積んである所へ自分も腰をかけて僕にも掛けさせた。

「政夫さん……お民さんはほんとに可哀相でしたよ。う

ちの姉さんたらほんとに意地曲りですからネ。何という根性の悪い人だか、私もはアこのうちに居るのは厭いやになつてしまった。昨日政夫さんが来るのは解りきつて居るのに、姉さんがいろんなことを云つて、一昨日おとといお民さんを市川へ帰したんですよ。待つ人があるだつぺとか逢いたい人が待ちどおかつぺとか、当こすりを云つてお民さんを泣かせたりしてネ、お母さんにも何でもいろいろなこと言つたらしい、とうとう一昨日お昼前に帰してしまつたのでさ。政夫さんが一昨日きたら逢われたんですよ。政夫さん、私はお民さんが可哀相で可哀相でならな

いだよ。何だつてあなたが居なくなつてからはまるで泣きの涙で日を暮らして居るんだもの、政夫さんに手紙をやりたいけれど、それがよく自分には出来ないから口惜くやしいと云つてネ。私の部屋へ三晩も硯すずりと紙を持ってきては泣いて居ました。お民さんも始まりは私にも隠していたけれど、後のちには隠して居られなくなつたのさ。私もお民さんのためにいくら泣いたか知れない……」

見ればお増はもうほろほろ涙をこぼしている。一体お増は極ごく人のよい親切な女で、僕と民子が目の前で仲好い風をすると、嫉妬しつとしん心を起すけれど、固もとより執念深いしやう性

でないから、民子が一人になれば民子と仲が好く、僕が一人になれば僕を大騒ぎするのである。

それから猶お増は、僕が居ない跡で民子が非常に母に叱られたことなどを話した。それは概略こうである。意地悪の嫂が何を言うても、母が民子を愛することは少しも変らないけれど、二つも年の多い民子を僕の嫁にすることはどうしてもいけぬと云うことになったらしく、それには嫂もいろいろ言うて、嫁にしないとすれば、二人の仲はなるたけ裂く様な工夫をせねばならぬ。母も嫂もそういう心持になって居るから、民子に対する仕向けは、

政夫の事を思つて居ても到底駄目であると遠廻しに諷示ふうしして居た。そこへきて民子が明けてもくれてもくよくよして、人の眼にもとまる程であるから、時々は物忘れをしたり、呼んでも返辞が遅かったりして、母の疝癩かんしやくにさわったことも度々あつた。僕が居なくなつてから二十日許り経つて十一月の月初めの頃、民子も外の者と野へ出る事となつて、母が民子にお前はひとあし一足跡になつて、座敷のまわりを雑巾掛してそれから庭に広げてあるむしろ蓆を倉へ片づけてから野へゆけと言いつけた。民子は雑巾がけをしてからうっかり忘れてしまつて、蓆を入れずに

野へ出た処、間がわるく其日雨が降ったから、其蓆十枚許りを濡らしてしまった。民子は雨が降ってから気がついたらけれど、もう間に合わない。うちへ帰って早速母に詫わびたけれど母は平日の事が胸にあるから、

「何も十枚許りの蓆が惜しいではないけれど、一体私の言いつけを疎おろそかに聞いているから起った事だ。もとの民子はそうでなかった。得手勝手な考え事などしているから、人の言うことも耳へ這入らないのだ……」
と、というような随分痛い小言を云った。民子は母の枕元近くへ行って、どうか私が悪かったのですから堪忍し

て……と両手をついてあやまった。そうすると母は又その何も他人らしく改まってあやまらなくともだと叱った。それで、民子はたまらなくなつてワツと泣き伏した。其のまま民子が泣きやんでしまえば何の事もなく済んだであらうが、民子はとうとう一晩中泣きとおしたので翌朝は眼を赤くして居た。母も夜時々眼をさましてみると、民子はいつでも、すすすす泣いている声がしていたというので、今度は母が非常に立腹して、お増と民子と二人呼んで母が顫ふるえ声こゑになつて云うには、

「相対あいたいでは私がどんな我儘なことを云うかも知れないか

らお増は聞人ききうてになつてくれ。民子はゆうべ一晩中泣きとおした。定めし私に云われたことが無念でたまらなかつたからでしょう」

民子はここで私はそうでありませんと泣声でいうたけれど、母は耳にもかけずに、

「成程私の小言も少し云い過ぎかも知れないが、民子だつて何もそれほど口惜しがつてくれなくてもよさそうなものじゃないか。私はほんとに考えると情なくなつてしまつた。かわいがつたのを恩に着せるではないが、もとを云えば他人だけれど、乳呑児の時から、民子はしよつ

ちゅう家へきて居て今の政夫と二つの乳房を一つ宛含ま
せて居た位、お増がきてからもあの通りで、二つのもの
は一つ宛四つのは二つ宛、着物を拵こしらえてもあれに
一枚これに一枚と少しも分け隔てをせないできた。民子
も真の親の様に思ってくれ私も吾子と違って余所の人は
誰だって二人を兄弟と思わないものはなかつた程である
のに、あとにも先にも一度の小言をあんなに悔しがって
夜中泣よじゆういてくれなくともよさそうなもの。市川の人達に
聞かれたらば、斎藤の婆ばあがどんなひどいことを云ったか
と思うだろう。十何年という間我子の様に思ってきたこ

とも只一度の小言で忘れられてしまったかと思うと私は口惜しい。人間というものはそうしたものかしら。お増、よく聞いてくれ、私が無理か民子が無理か。なアお増」母は眼に涙を一ぱいに溜^ためてそういった。民子は身も世もあらぬさままでいきなりにお増の膝^{ひざ}へすがりついて泣き泣き、

「お増や、お母さんに申訳をしておくれ。私はそんなだいたいそれた^{りょうけん}了簡ではない。ゆんべあんなに泣いたは全く私が悪かったから、全く私がとどかなかったのだから、お増や、お前がよく申訳をそういつておくれ……」

それからお増が、

「お母さんの御立腹も御尤もですけれど、私が思うにやお母さんも少し勘違いをして御いでなさいます。お母さんは永年お民さんをかわいがって御いでですから、お民さんの気質きだては解って居りましょう。私もこうして一年御厄介になつて居てみれば、お民さんはほんと優しいおとな温和しい人です。お母さんに少し許り叱られたって、それを悔しがって泣いたりなんぞする様な人ではありません。私がこんなことを申してはおかしいですが、政夫さんとお民さんとは、あアして仲好くして居たのを、何か

の御都合で急にお別れなさったもんですから、それから
というもの、お民さんは可哀相な程元気がないのです。
木の葉のそよぐにも溜息ためいきをつき鳥からすの鳴くにも涙ぐんで、
さわれば泣きそうな風でいたところへ、お母さんから少
しきつく叱られたから、留度とめどなく泣いたのでしよう。お
母さん、私は全くそう思いますわ。お民さんは決してあ
なたに叱られたとて悔しがるような人ではありません。
お民さんの様な温和しい人を、お母さんの様にあアいつ
て叱っては、あんまり可哀相ですわ」

お増が共泣きをして言訳をいうたので、固より民子は

憎くない母だから、俄に顔色を直して、

「なるほどお増がそういえば、私も少し勘違いをしていました。よくお増そういうてくれた。私はもうすっかり心持がなおった。民や、だまっておくれ、もう泣いてくれるな。民やも可哀相であつた。なに政夫は学校へ行つたんじゃないか、暮には帰ってくるよ。なアお増、お前は今日は仕事を休んで、うまい物でも拵えてくれ」

其日は三人がいく度たびもよりあつて、いろいろな物を拵えては茶ごとをやり、一日面白く話をした。民子は此日はいつになく高笑いをし元氣よく遊んだ。何と云つても

母の方は直ぐ話が解るけれど、嫂が間まがな隙ひまがな種々いろいろなことを言うので、とうとう僕の帰らない内に民子を市川へ帰したとの話であつた。お増は長い話を終るや否やすぐ家へ帰つた。

なる程そうであつたか、姉は勿論母までがそういう心になつたでは、か弱い望も絶えたも同様。心細さの遣瀬やるせがなく、泣くより外に詮せんがなかつたのだらう。そんなに母に叱られたか……一晩中泣きとおした……なるほどなどと思つと、再び熱い涙が漲みなぎり出してとめどがない。僕は暫くの間、涙の出るがままにそこにぼんやりして居

った。其日はとうとう朝飯あきはんもたべず、昼過ぎまで畑のあたりをうろついて了った。

そうなるに俄に家に居るのが厭いやでたまらない。出来るならば暮の内に学校へ帰って了いたかったけれど、そうもならないで漸くこらえて、年を越し元日一日置いて二日の日には朝早く学校へ立って了った。

今度は陸路市川へ出て、市川から汽車に乗ったから、民子の近所を通ったのであれど、僕は極りが悪くてどうしても民子の家へ寄れなかった。又僕に寄られたらば、民子が困るだろうとも思つて、いくたび寄ろうと思つた

けれど遂に寄らなかつた。

思えば実に人の境遇は変化するものである。其一年前までは、民子が僕の所へ来て居なければ、僕は日曜たびに民子の家へ行つたのである。僕は民子の家へ行つても外の人には用はない。いつでも、

「お祖母ばあさん、民さんは」

そら「民さんは」が来たといわれる位で、或る時などは僕がゆくと、民子は庭に菊の花を摘んで居た。僕は民さん一寸御出でと無理に背戸へ引張つて行つて、二間にけん梯子はしごを二人で荷にない出し、柿の木へ掛けたのを民子に抑え

させ、僕が登って柿を六個許りむつつとる。民子に半分やれば民子は一つで沢山というから、僕は其五つを持って其のまま裏から抜けて帰ってしまった。さすがに此時は戸村の家でも家中で僕を悪く言ったそうだけれど、民子一人は只にここにこ笑って居て、決して政夫さん悪いとは言わなかったそうだ。これ位隔てなくした間柄だに、恋ということ覚えてからは、市川の町を通るすら恥かしくなったのである。

此年の暑中休みには家に帰らなかつた。暮にも帰るまいと思つたけれど、年の暮だから一日でも二日でも帰れ

というて母から手紙がきた故、大おお三み十そ日の夜帰ってきた。
お増も今年きりで下さがったとの話でいよいよ話相手もない
から、又元日一日で二日の日に出掛けようとする、母
がお前にも言うて置くが民子は嫁に往いった、去年の霜月
やはり市川の内、大變有福な家だそうだ、と簡単にい
うのであった。僕ははアそうですかと無造作に答えて出
てしまった。

民子は嫁に往った。此一語を聞いた時の僕の心持は自
分ながら不思議と思うほどの平気であった。僕が民子を
思っている感情に何等の動揺を起さなかつた。これには

何か相当の理由があるかも知れねど、ともかくも事實はそうである。僕は只理窟りくつなしに民子は如何な境涯に入るうとも、僕を思っている心は決して変らぬものと信じている。嫁にいかががどうしようが、民子は依然民子で、僕が民子を思う心に寸分の変りない様に民子にも決して変りない様に思われて、其觀念は殆ど大石の上に座して居る様で毛の先ほどの危惧きぐしん心もない。それであるから民子は嫁に往つたと聞いても少しも驚かなかつた。しかし其頃から今までにない考えも出て来た。民子は只々少しも元気がなく、瘦やせ衰えて鬱ふさいで許り居るだらうとのみ思

われてならない。可哀相な民さんという観念ばかり高ま
ってきたのである。そういう訳であるから、学校へ往つ
ても以前とは殆ど反対になって、以前は勉^{つと}めて人中へ這
入って、苦悶を紛らそうとしたけれど、今度はなるべく
人を避けて、一人で民子の上に思いを馳^はせて楽しんで居
った。茄子畑の事や棉^{わたばたけ}畑の事や、十三日の晩の淋しい
風や、又矢切の渡で別れた時の事を、繰返し繰返し考
えては独り慰んで居った。民子の事さえ考えればいつで
も気分がよくなる。勿論悲しい心持になることが屢^{しばしば}あ
るけれど、さんざん涙を出せばやはり跡は気分がよくな

る。民子の事を思つて居れば却かえつて学課の成績も悪くないのである。是等も不思議の一つで、如何なる理由か知らねど、僕は実際そうであつた。

いつしか月も経つて、忘れもせぬ六月二十二日、僕が算術の解題に苦しんで考えて居ると、小使が齋藤さんおうちから電報です、と云つて机の端はたへ置いて去いつた。例のスグカエレであるから、早速舎監に話をして即日帰省した。何事が起つたかと胸に動悸どうきをはずませて歸つて見ると、宵闇の家の有様は意外に静かだ。台所で家中夕飯

時であつたが、只そこに母が見えない許り、何の変つた様子もない。僕は台所へは顔も出さず、直ぐと母の寢所へきた。行燈あんどんの灯も薄暗く、母はひったり枕に就いて臥ふせつて居る。

「お母さん、どうかしましたか」

「あア政夫、よく早く帰ってくれた。今私も起きるからお前御飯前なら御飯を済ましてしまえ」

僕は何の事か頻しきりに気になるけれど、母がそういうま
まに早急に飯をすまして再び母の所へくる。母は帯を結
うて蒲団ふとんの上に起きていた。僕が前に座つても只無言で

いる。見ると母は雨の様に涙を落して俯向うつむいている。

「お母さん、まアどうしたんでしよう」

僕の詞ことばに励まされて母は漸く涙を拭き、

「政夫、堪忍してくれ……民子は死んでしまった……私が殺した様なものだ……」

「そりやいつです。どうして民さんは死んだんです」

僕が夢中になって問返すと、母は嗚咽むせび返って顔を抑えて居る。

「始終をきいたら、定めしひどい親だと思っただろうが、こらえてくれ政夫……お前いちごんに一言の話もせず、たっ

やだと言う民子を無理に勧めて嫁にやったのが、こういうことになって了った……縦令たとい女の方が年上であろうとも本人同志が得心とくしんであれば、何も親だからとて余計な口出しをせなくもよいのに、此母が年甲斐もなく親だてらにいらぬお世話を焼いて、取返しのつかぬことをして了った。民子は私が手を掛けて殺したも同じ。どうぞ堪忍してくれ政夫……私は民子の跡追ってゆきたい……」

母はもうおいおいおい声を立てて泣いている。民子の死ということだけは判ったけれど、何が何やら更に判らぬ。僕とて民子の死と聞いて、失神するほどの思い

であれど、今日の前で母の嘆きの一通りならぬを見ては、泣くにも泣かれず、僕がおろおろしている所へ兄夫婦が出てきた。

「お母さん、まアそう泣いたって仕方がない」

と云えば母は、かまわずに泣かしておくれ泣かしておくれと云うのである、どうしようもない。

其間であによめ 嫂あによめが僅に話す所を聞けば、市川のそれがし 某それがしという

家で先の男の気性も知れているに財産も戸村の家に倍以上であり、それで向うから民子を強たつての所望、媒灼なこうど人なこうどというのも戸村が世話になる人である、是非やりたい是

非往つてくれということになった。民子はどうでもいやだと云う。民子のいやだという精神はよく判っているけれど、政夫さんの方は年も違い先の永いことだから、どうでも某の家へやりたいとは、戸村の人達は勿論親類までの希望であつた。それで愈いよいよ斎藤のおツ母さんに意見をして貰うということに相談が極まり、それで家のお母さんが民子に幾度意見いくたびをしても泣いてばかり承知しないから、とどのつまり、お前がそう剛情はるのも政夫の処ところへきたい考えからだろうけれど、それは此母が不承知でならないよ、お前はそれでも今度の縁談が不承知か。こ

んな風に言われたから、民子はすっかり自分をあきらめたらしく、とうとう皆様のよい様にといつて承知をした。それからは何もかも他のひとの言うなりになって、霜月半なかばに祝儀をしたけれど、民子の心持がほんとうの承知でないから、向うでもいくらかいや気きになり、民子は身持になったが、六月むつきでおりてしまった。跡の肥立ちが非常に悪く遂に六月十九日に息を引き取った。病中僕に知らせようとの話もあったが、今更政夫に知らせる顔もないという訳から知らせなかった。家のお母さんは民子が未だ口をきく時から、市川へ往って居って、民子がいけなくな

ると、もう泣いて泣いて泣きぬいた。一口まぜに、民子は私が殺した様なものだ、と許りいつて居て、市川へ置いたではどうなるか知れぬという訳から、昨日車で家へ送られてきたのだ。話さえすれば泣く、泣けば私が悪かった悪かったと云って居る。誰にも仕様がなから、政夫さんの所へ電報を打った。民子も可哀相だしお母さんも可哀相だし、飛んだことになってしまった。政夫さん、どうしたらよいでしょう。

嫂の話で大方は判ったけれど、僕もどうしてよいやら殆ど途方にくれた。母はもう半氣違いだ。何しろここで

は母の心を静めるのか第一とは思ったけれど、慰めようがない。僕だっていつそ気違いになつてしまつたらと思つた位だから、母を慰めるほどの気力はない。そうこうしている内に漸く母も少し落着いてきて、又話し出した。

「政夫や、聞いてくれ。私はもう自分の悪党にあきれて了つた。何だつてあんなひどい事を民子に言つたっけかしら。今更何程悔なんぼいても仕方がないけど、私は政夫……民子にこう云つたんだ。政夫と夫婦にすることは此母が不承知だからおまえは外よそへ嫁に往け。なるほど民子は私にそう云われて見れば自分の身を諦あきらめる外はな

い訳だ。どうしてあんな酷むごたらしいことを言ったのだらう。嗚呼ああ可哀相な事をしてしまった。全く私が悪党を云うた為に民子は死んだ。お前はネ、明朝あしたは夜が明けたら直ぐに往つてよ。早く民子の墓に参つてくれ。それでお母さんの悪かったことをよく詫びてくれ。ね、政夫」

僕も漸く泣くことが出来た。仮令たとどういふ都合があつたにせよ、いよいよ見込がなくなつた時には逢わせてくれてもよかつたらうに、死んでから知らせるとは随分ひどい訳だ。民さんだつて僕には逢いたかつたらう。嫁に往つてしまつては申訳がなく思つたらうけれど、それで

もいよいよの真ま際ぎわになつては僕に逢いたかつたに違ちがいな
い。実に情ない事だ。考かえて見れば僕もあんなこどもまり兇こども供もで
あつた。其後市川を三回も通りながらたずねなかつたは、
今更残念でならぬ。僕は民子が嫁にゆこうがゆくまいが、
只民子に逢いさえせばよいのだ。今一日逢いたかつ
た……次から次と果てしなく思あふいは溢あふれてくる。しかし
母にそういうことを言えば、今度は僕が母を殺す様なこ
とになるかも知れない。僕きつは屹きつと心を取り直した。
「お母さん、真ほんに民子は可哀相でありました。しかし
取とつて返らぬことをいくら悔んでも仕方がないですか

ら、跡の事をねんごろ懇ねんごろにしてやる外はない。お母さんは只々御自分の悪い様にばかりとっているけれど、お母さんとて精神こころは只民子の為政夫の為と一筋に思ってくれた事ですから、よしそれが思う様にならなかつたとて、民子や私等が何とてお母さんを恨みましよう。お母さんの精神こころはどこまでも情心でしたものを、民子も決して恨んではいやしまい。何もかもこうなる運命であつたのでしよう。私はもう諦めました。どうぞ此上お母さんも諦めて下さい。明日あすの朝は夜があけたら直ぐ市川へ参ります」

母は猶なお詞なほを次いで、

「成程何もかもこうなる運命かも知らねど今度という今度私はよくよく後悔しました。俗に親馬鹿という事があるが、其親馬鹿が飛んでもない悪いことをした。親がいつまでも物の解ったつもりで居るが、大へんな間違いであつた。自分は阿あ弥み陀だ様におすがり申して救うて頂く外に助かる道はない。政夫や、お前は体を大事にしてくれ。思えば民子はなが年の間にもついで私にさからつたことはなかつたおとなしい兎であつただけ、自分のした事が悔いられてならない、どうしても可哀相でたまらない。民子が今はの時の事もお前に話して聞かせたいけれど私

にはとてもそれが出来ない」

などと又声をくもらしてきた。もう話せば話すほど悲しくなるからとて強しいて一同寝ることにした。

母の手前兄夫婦の手前、泣くまいとこらえて漸くこらえていた僕は、自分の蚊帳かやへ這入り蒲団に倒れると、もうたまらなく一度にこみ上げてくる。口へは手拭を噛かんで、涙を絞った。どれだけ涙が出たか、隣室の母から夜が明けた様だよと声を掛けられるまで、少しも止やまず涙が出た。着たまままで寝ていた僕は其のまま起きて顔を洗うや否や、未だほの闇くらいのに家を出る。夢のように二里

の路を走って、太陽が漸く地平線に現われた時分に戸村の家の門前まで来た。此家のこのや竈かまどのある所は庭から正面に見透みえすいて見える。朝炊きに麦藁を焚たいてパチパチ音がする。僕が前の縁先に立つと奥に居たお祖母さんが、目敏めびとく見つけて出てくる。

「かねや、かねや、とみや……政夫さんが来ました。まア政夫さんよく来てくれました。大そう早く。さアお上んなさい。起き抜きでしょう。さア……かねや……」

民子のお父さんとお母さん、民子の姉さんも来た。

「まアよくきてくれました。あなたの来るのを待ってま

した。とにかく上に上って御飯をたべて……」

僕は上りもせず腰もかけず、暫く無言で立っていた。
漸くと、

「民さんのお墓に参りにきました」

切なる様は目に余ったと見え、四人とも口がきけなくなつて了つた。……やがてお父さんが、

「それでもまあ一寸御飯を済すまして往つたら……あアそう
ですか。それでは皆して参つてくるがよかろう……いや
着物など着替えんでよいじゃないか」

女達は、もう鼻はな吸すすりをしながら、それじゃアとて立ち

あがる。水を持ち、線香を持ち、庭の花を沢山に採る。
 小田巻草千日草てんじくぼたん牡丹てんでんと各々手にとり別けて出かける。
 柿の木の下から背戸へ抜け槇屏まきべいの裏門を出ると松林
 である。桃畑梨畑の間をゆくとわずか僅の田がある。其先の
 松林の片隅に雑木もちのきの森があつてあまた数多の墓が見える。戸村
 家の墓地は冬青もちのき四五本を中心として六坪許ばかりを区別けし
 てある。其のほどよい所の新墓にいほかが民子とわが永久すみかの住家であ
 った。葬りをしてから雨にも逢わないので、ほんの新ら
 しいままちからがみで、力紙なども今結んだ様である。お祖母さ
 んが先に出でて、

「さア政夫さん、何もかもあなたの手でやって下さい。民子のためには真ほんに千僧の供養にまさるあなたの香花こうげ、どうぞ政夫さん、よおくお参りをして下さい……今日は民子も定めて草葉の蔭で嬉しかろう……なア此人にせめて一度でも、目をねむらない民子に……まアせめて一度も逢わせてやりたかった……」

三人は眼をこすっている様子。僕は香を上げ花を上げ水を注いでから、前に蹲うずくばって心のゆくまで拝んだ。真しんに情ない訳だ。寿命で死ぬは致方しかたないにしても、長く煩わずらって居る間に、あア見舞ってやりたかった。一目逢いた

かった。僕も民さんに逢いたかったもの、民さんだつて僕に逢いたかったに違いない。無理無理に強いられたとは云え、嫁に往つては僕に合わせる顔がないと思つたに違いない。思えばそれが愍然びんぜんでならない。あんな温和おとなしい民さんだもの、両親から親類中かかつて強いられて、どうしてそれが拒まれよう。民さんが気の強い人ならきつと自殺をしたのだけれど、温和しい人だけにそれも出来なかつたのだ。民さんは嫁に往つても僕の心に変りはないと、せめて僕の口から一言いつて死なせたかった。世の中に情ないといつてこつういふ情ないことがあるう

か。もう私も生きて居たくない……吾知らず声を出して僕は両膝と両手を土地じべたへ突いて了った。

僕の様子を見て、後に居た三人がどんなに泣いたか。僕も吾一人でないに気がついて漸く立ちあがった。三人の中の誰がいうのか、

「なんだって民子は、政夫さんということをば一言も言わなかったのだらう……」

「それほどに思い合ってる仲と知ったらあんなに勧めはせぬものを」

「うすうすは知れて居たのだに、此人の胸も聞いて見

ず、民子もあれほどいやがったものを……いくら若いからとてあんまりであつた……可哀相に……」

三人も香花を手向け水を注いだ。お祖母さんが又、「政夫さん、あなた力紙を結んで下さい。沢山結んで下さい。民子はあなたが情なまけの力を便りにあの世へゆきませす。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

僕は懐にあつた紙の有りたけをちからづえ力杖に結ぶ。此時ふつと気がついた。民さんは野菊が大変好きであつたに野菊を掘ってきて植えればよかつた。いや直ぐ掘ってきて植えよう。こう考えてあたりを見ると、不思議に野菊が

繁あふつてる。弔あはれいの人に踏ふまれたらしいが猶なほ茎こゝろ立たつて青々として居る。民さんは野菊の中へ葬うられたのだ。僕は漸しく少し落着おいて人々と共に墓場かぶらを辞やめた。

僕は何なにもほしくありません。御飯ごはんは勿論もちろん茶もほしく
ないです、此このままお暇いとま願ねがいます、明日あしたは又また早く上あり
ますからといいつて帰かえろうとすると、家うち中じゆうで引留ひきどめる。
民子のお母おさんはもうたまたまらななそうそうな風ふうで、

「政夫せいぶさん、あなたにそうして帰かえられては私等わたしどもは居いて
も起たつてもいいられませせん。あなたが面白おもしろくないお心持こころもちは

重々察しています。考えてみれば私共の届かなかつたために、民子にも不憫な死ふびんにようをさせ、政夫さんにも申訳のないことをしたのです。私共は如何様いにもあなたにお詫びを致します。民子可哀相と思召おほしめしたら、どうぞ民子が今はの話も聞いて行って下さいな。あなたがお出いでになったら、お話し申すつもりで、今日はお出でか明日はお出でかと、実は家中がお待ち申したのですからどうぞ……」

そう言われては僕も帰る訳にゆかず、母もそう言ったのに気がついて座敷へ上った。茶や御飯やと出されたけ

れど真似まね許りで済ます。其内に人々皆奥へ集りお祖母さんが話し出した。

「政夫さん、民子の事に就ては、私共一同誠に申訳がなく、あなたに合せる顔はないのです。あなたに色々御無念な処もありましようけれど、どうぞ政夫さん、過ぎ去った事と諦めて、御勘弁を願います。あなたにお詫びをするのが何より民子の供養になるのです」

僕は只もう胸一ぱいで何も言うことが出来ない。お祖母さんは話を続ける。

「実はと申すと、あなたのお母さん始め、私又民子の

両親とも、あなたと民子がそれほど深い間なかであつたとは知らなかつたもんですから」

僕はここで一言いいだす。

「民さんと私と深い間とおっしゃつても、民さんと私とはどうもしやしません」

「いいえ、あなたと民子がどうしたと申すではないです。もとからあなたと民子は非常な仲好しでしたから、それが判らなかつたんです。それに民子はあの通りの内気な児でしたから、あなたの事は一言も口に出さない。それはまるきり知らなかつたとは申されません。それですか

らお詫びを申す様な訳……」

僕は皆さんにそんなにお詫びを云われる訳はないという。民子のお父さんはお詫びを言わしてくれという。

「そりや政夫さんのというのは御ごもつとも尤です、私共が勝手なことをして、勝手なことをお前さんに言うというものですが、政夫さん、聞いて下さい、理窟の上の事ではないです。男親の口からこんなこというも如何いかですが、民子は命に替えられない思いを捨てて両親ふたおやの希望に従ったのです。親のいいつけで背かれな**い**と思**う**ても、道理で感情を抑えるは無理な処もありましよう。民子の死は全く

それ故ですから、親の身になって見ると、どうも残念で
ありまして、どうもしやしませんと政夫さんが言う通り、
お前さん等^{たち}二人に何の罪もないだけ、親の目からは不憫
が一層でな。あの通り温和しかった民子は、自分の死ぬ
のは心柄とあきらめてか、ついで一度不足らしい風も見
せなかつたです。それやこれやを思いますとな、どう考
えてもちと親が無慈悲であつた様で。……政夫さん、察
して下さい。見る通り家中がもう、悲しみの闇に鎖^{とぎ}され
て居るです。愚かなことでしょうが此場合お前さんに民
子の話を聞いて貰うのが何よりの慰藉^{いしや}に思われますか

ら、年がいもないこと申す様だが、どうぞ聞いて下さい」
お祖母さんが又話を続ける。結婚の話からいよいよむずかしくなつたまでの話は嫂が家での話と同じで、今はという日の話はこうであつた。

「六月十七日の午後に医者が出て、もう一日二日の処だから、親類などに知らせるならば今日中にも知らせるがよいと言いますから、それではとて取敢とりあえずあなたのお母さんに告げると十八日の朝飛んできました。其日は民子は顔色がよく、はっきりと話も致しました。あなたのおつかさんがきまして、民や、決して気を弱くしてはなら

ないよ、どうしても今一度なおる気になつておくれよ、民や……民子はにっこり笑顔さえ見せて、矢切のお母さん、いろいろ有難う御座います。長々可愛がつて頂いた御恩は死んでも忘れません。私も、もう長いことはありますまい……。民や、そんな気の弱いことを思つてはいけない。決してそんなことはないから、しっかりしないではいけないと、あなたのお母さんが云いましたら、民子は暫くたって、矢切のお母さん、私は死ぬが本望であります、死ねばそれでよいのです……といひましてから猶口の内では何か言つた様で、何でも、政夫さん、あなた

の事を言ったに違いないですが、よく聞きとれませんでした。それきり口はきかないで、其夜の明方に息を引取りました……。それから政夫さん、こういう訳です……。夜が明けてから、枕を直させます時、あれの母が見つめました、民子は左の手に紅絹もみの切れに包んだ小さな物を握って其手を胸へ乗せているのです。それで家中の人が皆集って、それをどうしようかと相談しましたが、可哀相なような気持もするけれど、見ずに置くのも気にかかるとにかく開いて見るがよいと、あれの父が言い出しました。皆の居る中であけました。それが政さん、あな

たの写真とあなたのお手紙でありまして……」

お祖母さんが泣き出して、そこにいた人皆涙を拭いて
いる。僕は一心に畳を見つめていた。やがてお祖母さん
がようよう話を次ぐ。

「そのお手紙をお富が読みましたら、誰も彼も一度に声
を立て泣きました。あれの父は男ながら大声して泣く
のです。あなたのお母さんは、気がふれはしないかと思
うほど、口説いて泣く。お前達二人が之れほどの語らい
とは知らずに、無理無体に勧めて嫁にやったは悪かった。
あア悪いことをした、不憫だった、民や、堪忍して、私

が悪かったから堪忍してくれ。俄にわかの騒ぎですから、近隣きんじよの人達が、どうしましたと云って尋ねにきた位でありました。それであなたのお母さんはどうしても泣き止まな
いのです。体に障ってとは思ひまして葬式が済むと車で御
送り申した次第です。身を諦めた民子の心持が、こう判
って見ると、誰も彼も同じことで今更の様に無理に嫁に
やった事が後悔され、たまらないですよ。考えれば考え
る程あの児が可哀相で可哀相で居ても起つても居られな
い……せめてあなたに来て頂いて、皆が悪かったことを
充分あなたにお詫びをし、又あれの墓にも香花をあなた

の手から手向けて頂いたら、少しは家中の心持も休まるかと思ひまして……今日の事をなんぼう待ちましたろ。政夫さん、どうぞ聞き分けて下さい。ねイ民子はあなたにはそむいては居ません。どうぞ不憫と思つてやって下さい……」

一語一句皆涙で、僕も一時泣きふして了つた。民子は死ぬのが本望だと云つたか、そういったか……家の母があんなに身を責めて泣かれるのも、其筈であつた。僕は、「お祖母さん、よく判りました。私は民さんの心持はよく知っています。去年の暮、民さんが嫁にゆかれたと聞

いた時でさえ、私は民さんを毛程も疑わなかつたですもの。どの様なことがあるうとも、私が民さんを思う心持は変わりません。家の母なども只そればかり言つて嘆いて居ますが、それも皆悪気があつての業わざでないのですから、私は勿論民さんだつて決して恨みに思やしません。何もかも定まつた縁と諦めます。私は当分毎日お墓へ参ります……」

話しては泣き泣いては話し、甲一語乙一語いくら泣いても果てしがない。僕は母の事も気にかかるので、もうお昼だという時分に戸村の家を辞した。戸村のお母さん

は、民子の墓の前で僕の素振りが余り痛わしかつたから、途中が心配になるとて、自分で矢切の入口まで送ってきてくれた。民子の愍然びんぜんなことはいくら思うても思いきれない。いくら泣いても泣ききれない。しかしながらまた目の前の母が、悔悟の念に攻められ、自ら大罪を犯したと信じて嘆いている愍然さを見ると、僕はどうしても今は民子を泣いては居られない。僕がめそめそして居ったでは、母の苦しみは増す許りと気が付いた。それから一心に自分で自分を励まし、元気をよそおうてひたすら母を慰める工夫をした。それでも心にならない事は仕方のない

もの、母はいつしかそれと気がついてる様子、そうなる
ては僕が家に居ないより外はない。

毎日七日なぬかの間市川へ通って、民子の墓の周囲には野菊
が一面に植えられた。其翌あくる日に僕は充分母の精神の
休まる様に自分の心持を話して、決然学校へ出た。

*

*

*

民子は余儀なき結婚をして遂に世を去り、僕は余儀な
き結婚をして長らえている。民子は僕の写真と僕の手紙

とを胸を離さずに持って居よう。幽明遙はるけく隔つとも僕
の心は一日も民子の上を去らぬ。

(明治三十九年一月)

日本文学電子図書館

野菊の墓

著 者：伊藤左千夫

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館